訃報　大田 善秋先生

大田先生 追悼

日時：令和2年8月1日（土）

井汲 憲治（群馬県）

大田 善秋先生がお亡くなりになり、もうすぐ半年が経とうとしています。一年前の今頃、大田先生が天国に旅立たれるなんて誰も夢にも思っていませんでした。

昨年3月に大田先生から血液の病気であることを伝えられましたが、骨髄移植しか根治方法がないこと、それまでは週に数回の輸血を続けていくことを教えてもらいました。その後、先生とお会いするときは、いつもの笑顔で元気だったのですが、年齢を考えると楽観ばかりはできないとも思いました。

コロナも重なり、通院やその行き帰りにもとても気を使われていたと思います。幸い6月にはドナーも見つかり、血液治療のメッカである都立駒込病院で骨髄移植を受けることになり、私もホッとしました。

入院の2日前に、入院中に痛み出すのを心配していた上顎7番の麻抜即根充のために私の医院に来られました。根充をＸ線で確認した際、“うまくいってるじゃない”と治療結果に満足しているようでした。帰り際に大田先生の車の前で“頑張って。駒込病院は最高の治療なのできっとうまくいくから..”と伝えたのが、先生との最後の会話となってしまいました。

8月1日に大田先生が亡くなられた直後に奥様から訃報を知りました。

コロナということもあり、通夜と告別式は高崎で限られた人数で執り行われましたが、大きな部屋から溢れんばかりの生花が飾られており、大田先生が多くの方から慕われていたことが偲ばれました。告別式には会員を代表して田中 譲治会長と保田講習会委員長が出席されました。

新しい会員は、認定講習会の最初に行われる口腔内写真で研究会の洗礼を受けることになりますが、大田先生は1995年の最初の100時間コースから口腔内写真を熱意をもって担当されてこられました。

今でこそ口腔内写真撮影は当たり前のこととなっているものの、デジタル一眼レフカメラの影も形も無かった1980年代の前半から、臨床おける口腔内写真の重要性に気づき、それを熱心に語り、本研究はもとよりたくさんのドクターにそれ広めてこられました。かく言う私も、“写真とレントゲンはドクターの臨床レベルを語る”という大田先生の信念に大いに影響を受けた一人です。

大田先生と私は1985年にインプラント臨床研究会に入会しましたが、同じ高崎市ということもあり、この25年以上研究会や学会、そして地元歯科医師会の学術委員会で行動をともにすることが多く、家内の次に最も多く時間を共にしてきた人だと思います。

大田先生は粋な音楽の趣味人であり、また、いざやるとなったら何に対しても真剣に、正直に、真面目に取り組む先生でした。そして、周りの人への愛情にあふれた先生でした。

もう大田先生の洋楽の歌声を聞くことはできなくて悲しいですが、多くの研究会の先生方の心の中に大田先生との楽しい思い出が残りつづけることと思います。

大田先生！先生の大好きな臨床研究会を天国から見守っていてください。

合掌